

川原一之著

口 伝

谷 焼 砒 垂



岩 波 新 書

137



川原一之著

口 伝

亜 砒 焼 き 谷

137

川原一之

1947 年福岡県に生まれる。
1969 年早大政経学部新聞学科卒、
朝日新聞記者。
1975 年退社、記者振り出しの宮崎
に移り住み、土呂久敏毒の記録
と取り組む。

口伝 亜砒焼き谷

岩波新書(黄版) 137

1980 年 11 月 20 日 第 1 刷発行 ©

定価 380 円

著 者 かわ川 はら原 かず一 ゆき之

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

もくじ

1	かな山がまた始まるげな……………	一
2	こんままでは死につぶれじゃが……………	二
3	戦時たあいえ部落をつぶさせちゃならん……………	二七
4	金が仇敵の人生じゃの……………	一七
	あとがき……………	三九

版画 川原由紀子

1

かな山がまた始まるげな



その一 樋の口 (1)

手を広げてみない。開いた指の先から手首に集まって、それから太い腕へ。そんなぐあいには、古祖母山の谷あいから土呂久川へと水は流れてくる。土呂久は、川沿いの縦長の部落じゃ。川が部落を通り抜くる途中、固い岩盤にぶつかって、ほとんど直角に曲ったところがあるう。あの曲り角の右岸は「樋の口」と呼ばれる一帯での。その昔、土呂久鉾山で盛んに銀が掘られたころのこと、坑内水を汲み上ぐる樋の出入口があった。それがこの名の由来、といわれておる。そこに、四十坪を越す広い母屋、そぎ葺の二階付きの土蔵、牛を飼う馬屋が建っておった。部落の者なこの家を、地名と同じ屋号で呼んどった。「樋の口」とな。

やがて、竹の子が生えようとする季節のことじゃ。

「樋の口」の親家の年保さんが、どこからかフラリと舞い戻ってきて、一緒に連れのうち来た夫婦もんを、迎えに出た弟の助さん夫婦に紹介した。そして、こういうた。

「見ちくり、土呂久でまた、かな山が始まるかい」

土呂久鉾山には、三百年を越ゆる歴史がある。豊後の商人守田山弥が銀山として開発した江戸時代の初めには、ずい分とはずんだらしい。

へ土呂久かな山誰が掘りそめた

府内山弥どんのヨゝ掘りそめた

トコトウトウトコトウトウ

〽床屋千軒みな吹きたつりや

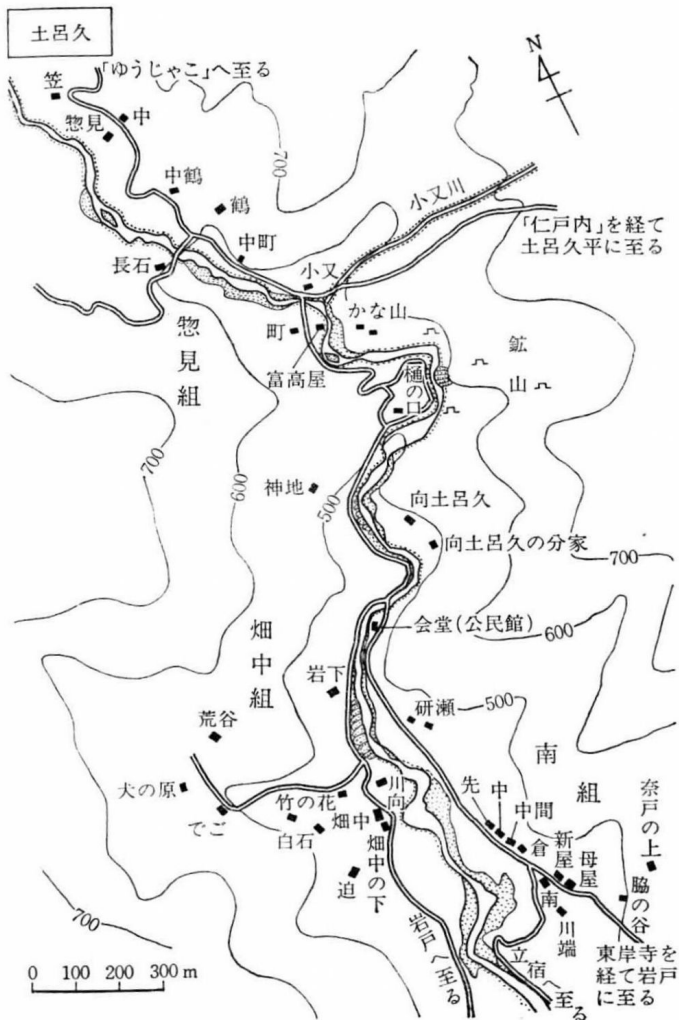
空を舞う鳥ヨゝみな落てる

トコトウトウトコトウトウ

これは土呂久のかね吹き唄じゃがよ、千軒のかな床はちと大きにしても、何百人もの鉦夫でたいそう賑うたとみゆる。女郎屋敷跡とか寺屋敷跡と呼ばれる地名が、そんなところの名残りでの。山弥には「夢買い山弥」の伝説があつて、後世に語り継がれるほど、土呂久の銀で大儲けした。その伝説ちゆうのは、こげな話じゃ。

豊後から山越やまごしして日向へ行商に來た山弥が、ある日、山の中で一人の男と出会つた。二人で腰を降して話しておるうち、その男は眠つてしまい、目を覚ましてかういうた。「おかしな夢を見た。蜂が土の中へもぐつては、金の粉をくわえて出てくる夢だった」。山弥は大いに喜んで「ぜひその夢をわしに売ってくれ」ちゆうて錢を渡すと、その男が夢に見た場所を探して鶴つ嘴くちばしを打ち込んだ。こうして、土呂久かな山を掘りあてたげな。

銀山を經營して一躍大富豪になつた山弥は、府内の領主日根野吉明にねたまれての。一族みな殺しにされた、といわれておる。土呂久鉦山はそのあと所有者が転々と変わり、栄枯盛衰を繰り返した。山口県阿武郡篠生村出身の竹内令昨れいさくが、鉦業權を持ったんが明治二十七年。細々



1 かな山がまた始まるげな

と銅を掘っておったが、明治の終りには休山、坑口は雑草におおわれてしまふ有様じゃった。そげなとき年保さんの連れち来た夫婦もんが、土呂久川をはさんだ「樋の口」の真向かいで、なにやら見たことのねえ窯を築き始めた。この夫婦もんは、窯築の専門家らしかった。部落の石工の高市つあんも引張り出され、粘土をこねては固めていく。珍しそうに眺むる土呂久ん衆は「年保んやつ、こんどはなに始めたつか」と不安に思うた。

「樋の口」は岩戸村でも指折りの山林地主じゃ。そんなま跡をとれば、なに不自由なからうに、年保さんは鉦山にとりつかれた。明治四十四年、立宿部落の善衛さんと共同で小芹に鉦山を開発しち、大阪の業者に売り渡した。これで、えらいな金を儲けて、すっかり病み付きになつての。鉦山師としてあっちへ転々こっちへ転々、土呂久に落ち着くことがない。

年保さんと嫁女のカヤさんとの間に、三人の子がでけた。女ん子二人は五つか六つで死んで、長男の敬さんだけ残った。年保さんな嫁女と子どもを「樋の口」に置いたまんま、イトという芸者を身請けして寄りつかんごとなつた。助さんの嫁女のカヤさんが、カヤさんの実の姉で、カヤさんは姉さん夫婦の世話になつて暮しておったが、胸を患うて三十三歳で死んだ。「年保には絶対知らせてくれるな」といい残したそうな。極道の年保さんに代つて、次男の助さんが「樋の口」を継いだ。

窯築が始まって、どのくらいの日数がたつたろうか。「できたぞ。できた」。男が「樋の口」の土間に駆け込んで大声をあげた。両手に、新聞紙の包みが大切そうにかかえてある。家ん中

から、年保さんと助さんが飛び出しちくる。土間に置いた包みが、二人の目の前で開かれた。出てきたのは、雪んように真白い粉。一升ばかりあったろうか。この粉を見て、年保さんは跳びあがって喜んだ。さっそく八畳の居間では、窯祝いの飲み方たい。上機嫌の年保さんが、窯をつくった夫婦もんや石工の高市つあんに、焼酎をついで回った。

この様子を、物陰からそと見ていた少年がおった。「竹の花」の実雄さんじゃ。岩戸尋常小学校を卒業して「樋の口」へ年季奉公に出た最初年、つまり大正九年の出来事になる。こんなとき宝物んどつ大切にされた真白い粉が、土呂久鉾山で焼かれた亜硫酸第一号じゃったつよ。

その二 開 山

年保さんのつくった窯で、なにやら真白い粉がとれた。その話はすぐ部落中に広まった。「かな山がまた始まるげな」。部落はいっきにわきたった。無理もねえ。そんなところは今と違くて、金取りの少ない時代じゃ。鉾山が始まれば、薪が売れる。木炭が売れる。坑木が売れる。坑内へ下がれば、日役がとれる。鉾山の敷地を持つとる者に、地代がはいる。

鉾山の敷地は「樋の口」の助さんと「かな山」の利喜治じいやんが持つておった。「樋の口」は古祖母山の中腹にも、広い山林を持つ大地主。それに比べ利喜治じいやんは、鉾山付近に四町五反を持つだけの小せえ地主じゃ。その土地も明治の終りにやっと買い集めたばかりで、鉾

山が始まって地代のはいる日を、心待ちにしておった。

同じころ、もう一つ部落のわきたつ出来事があつた。山奥の土呂久にも、電氣が来たんじやよ。土呂久は上から惣見、畑中、南と三つの組に分れちよる。畑中と南に電灯が架設されたんが大正六年ごろ、惣見はだいぶ遅れち、鉾山の始まる少し前だったろうや。珍しゅうしてな。それまで、明りといえは石油ランプでの。学校帰りに岩戸の店で石油を五合、一升と分けちもらうのが、小学生の仕事になっておった。それがねえなるし、ランプ掃除もなくなる。なにしろ、夜通し明るくでくる。部落に悪



そう坊主がおつての。柿の木に登つて、そばを通つとる被覆線をはいで、二本の線を合わせる。青白い火をふくと、瞬間、家の電氣が消ゆる。これを繰り返すと、部落全体の電灯がポッカポッカ点滅してな。まっ暗な谷間で、それは、きれいな光景じやつた。電氣がついたあと、部落ん衆は総寄りで、電氣工夫を囲む盛大な電氣祝いをしたものよ。

電気はこの山の中に、文明を運んできた。ところが鉾山は、「亜砒酸」ちゅう耳慣れん言葉と一緒に鉾毒を運んできたんじや。

誰も毒をつくる鉾山とは知らざった。窯築の専門家の夫婦もんに指図されて、坑外では本格的な亜砒焼き窯の築造が始まった。ひとかかえもある大きな野石や川石が運ばれちくる。石工の高市つあんが刃槌で石の角を落して、うまいこと角と角を合わせながら積んでいく。高さ二間の窯じゃき、壁の厚みは半間もあつたろうや。一重ではとてももちこたえられん。内石垣と外石垣と、石を二重にして積んでいった。石と石のあいさに、水でねった粘土を目打ちしていく。石垣の内側にも、粘土の厚い壁を張った。土呂久には「青まさ」というて、窯土にもつちこいの粘土がある。三百何十年前か前の山弥時代から、銀を吹く床屋に使うたらしい。炭焼き窯も置所さんも、この土でつくった。固まりやすうて火に強く、どんな熱でも灰にはならん。

坑内では、坑道のとりあけが始まった。明治の終りに銅山がやまつたあと、長いこと使われとらんで途中が埋まつとる。それを、人が通らるるように掘っていく。

部落から二、三十人も日役とりに出たろうか。そんなころ一日働いて、八十銭から一円くらい。坑口近くの斜面に焼き窯が数基築かれ、いつしか年保さんの連れち来た夫婦もんは姿を消して、代りに佐伯から、宮城正一というひとり者がやって来た。「樋の口」に一年ほど住みついたこの男の指導のもと、いよいよ亜砒焼きが始まる。土呂久亜砒鉾山の開山、それは大正九年六月のことじや。

その直前の五月二日、「かな山」の利喜治じいやんが六十九歳で死んだ。鉾山と隣り合わせの家で、土呂久谷にこだまする槌の音を聞きながらの往生じゃった。胃腸を病んじよらしたのか、晩年は足を壁にもたせかけ、さかしに寝ころぶことが多かった。鉾山とそのまわりの土地四町五反は、親家子おやけごの喜右衛門さんが相続した。まだそんなときな、亜砒鉾山がどんな物語をつくりだすか、部落ん衆は誰ひとり想像でけざった。

その三 元 祖

土呂久とろくたあ珍しい地名じゃ。その名の由来として、こげな話が伝わっておる。

豊後の守田山弥さんやが、鉾山として開発した江戸時代の初めのこと。ポルトガル人の鉾山技師が招かれち来て、南蛮吹きなどの新しい技術を教えたらしい。そんな外人の名前がヨセフ・トロフで、トロフを記念して「とろく」ちゅう地名がつけられたげな。

この説は、どうか根拠がなからうごたる。それより前の太閤検地の報告に、

一、高拾四石七斗九合 土路久

と書いてある。土呂久の地名がもつと昔からあって、ポルトガル人技師は土呂久に來たのにちなんで、トロフと名乗ったんじゃねえかの。「とろく」には、僻遠の地という意味があるそうな。ここより奥に、もう人里はねえ。二里半も山道を歩あるけば、大分との県境。峠の向こうは尾お

平鉾山になる。

「豊後商人の歩いた跡は草木もはえぬ」。宮崎ではそんな風にいう。一方大分では「日向算用」ちゅう言葉が使われる。日向人は計算にうとくてたまされやすい、という意味での。佐伯から土呂久へ渡ってきた宮城正一の頭にも、この言葉があったように思えてならん。

宮城を先頭に、その後もいろんな人物が、佐伯から土呂久鉾山へやってきた。野村金吾、川田平三郎、野村弥三郎、野村弥佐治とな。大正中ごろの佐伯は、東洋一の亜砒酸の生産を誇る町だったのよ。昔は軍港、今は国際貿易港として名を売ったこの町に、亜砒酸煙毒の話が埋まつとることを、知る者は少なからう。

あれは大正四年のこと。鳥越の宮吉じいやんのところへ、ひょろりと瘦せた男が訪ねて来た。宮吉じいやんは大阪行き帆船の船主として活躍したもんじゃが、そんなところはもう隠居しておった。しばらくして、宮吉じいやんの援助を受けたその男が、町はずれの岬の突きでたあたりに、こめえ工場を建てた。北を佐伯湾、三方を山に囲まれて、人目を避くるちゅうたたまいの工場が、佐伯で最初の亜砒酸工場での。ひょろりと瘦せた男が、それから五年後に土呂久へ現れた宮城正一じゃった。

四国出身の宮城は佐伯に来るまでに、どこかで亜砒焼きの技術を身につけておったとみゆる。佐伯の西南十五里に、木浦鉾山がある。宮城はこの硫砒鉄鉾から、亜砒酸をとることを考えた。まず木浦鉾山で粗焼きして、粗製の亜砒酸をつくる。こん粗砒を馬車に積んで佐伯へ運ぶ。

佐伯の工場でこれを精製して、純度九九・九パーセントの精砒をつくり、箱につめち帆船で大坂方面に出荷した。

こいつが当たった。ひとつは時期もよかった。前年の大正三年に、欧州戦争の開戦じゃ。亜砒酸輸出のドイツで、生産量がぐぐっと落ちた。亜砒酸の使い道は、医薬品、染料、殺虫剤、除草剤、印刷用インクといろいろあった。亜砒酸を原料にした毒ガスを、独仏英が実戦で使ったのも、この戦争じゃった。負け戦のドイツに代って、日本が輸出にのしかかる。佐伯の亜砒焼きにはずみがついた。大正八年には狭い岬の一带に、五軒の亜砒酸工場が建ち並んだつよ。こん年の生産額は三十万円を越えち、イギリス、南米、南洋向けの船が大いに出入りしたもんだ。

反面、煙害もひどかった。山の草木は枯れてしまい、火事跡とちいともかわらん。あのあたりの地名は「苦木」^{にがき}じゃが、そんな名の通り、立木は煙に苦しめられての。国有林じゃき、住民の苦情は聞かずにすんだ。ところが一軒だけ、農地の近くに工場があった。こいつの被害が相当なもので、がまんだけざった農民七十人が、大分県知事に工場の移転を請願して、新聞を賑わしたこともある。農民は亜砒酸工場の被害を「煙毒」と呼んだ。佐伯の煙毒のはしりも、実は宮城じゃ。

岬の突端は交通の便が悪いがために、苦木の工場を町の近くへ移したときのこつ。たちまち農作物に被害が出た。農民が立ち上って、煙毒の損害賠償と工場移転を宮城に要求した。結局、

佐伯町長の小田部隣が中にはいり、宮城が補償金として百円を払い、工場をもとの苦木に戻すことで落ち着いた。

亜砒酸景氣に乗って、宮城はしこたま儲けた。佐伯の稼ぎだけでは満足でけさったのか、大正九年六月、いよいよ土呂久へ乗り込んでくる。鉾山を求めて渡り歩くのが、鉾山師の習性かの。佐伯の亜砒酸関係の者な「宮城さんは九州の亜砒酸の元祖」という。元祖なら、山にはさまれた土呂久で亜砒を焼けば、どげな被害が起こるもんか十分にわかっておったはずじゃ。佐伯で経験済みじゃきよ。被害にかまわず、宮城は亜砒を焼き始めた。「日向人をだまくらかすのはわきゃねえ」。そう考えたと思えん。鉾山師はじき、別の鉾山へ移ることがでくる。じゃが土呂久の者な、煙毒にやられても土地を捨てて逃ぐるわけにゃいかん。

その四 奉公人

「樋の口」に奉公に出ていた政市つぁんに、東岸寺から嫁が来た。小柄でほっそりしておったが、よう働く嫁女でな。二人は夜の明けぬうちから「樋の口」の牛をひいて、秣刈りに出る。昼は「樋の口」の二町足らずの田畑を耕して、夜は草履づくりの夜なべがつづく。そのあと牛を養うて、寢床につく。まじめで働きの者の政市つぁんに似合いの嫁女じゃと、そりゃあ評判になった。政市つぁんが数えて二十三歳、嫁のクミさん十九歳。大正八年秋のこつ。二人は「樋

の口」の勝手口に屋根をさしかけて、そぎ葺のこめえ小屋で暮し始めた。

政市つあんは生まれつきの苦勞人じゃ。「樋の口」へ年季奉公に出たのも、ちよいとしたわけありよ。上村の熊治さんの次男坊として、明治三十年七月政市つあんは生まれた。熊治さんは身体が弱かったもんじゃ。三人の幼な子のこして若死した。三人の子連れた母親のカネさんは十歳も年下の皿糸の竹治さんとこへ嫁入った。政市つあんがまだ、三つか四つのときんこつ。運の悪いことが続くものよ。竹治さんの父親の文弥さんが、保証かぶりで他人の借金を背負い込んでしもた。墓石刻みの竹治さんは、そりゃあもう大酒飲みでな。この金を返す力はない。小学生の政市つあんに、白羽の矢がたった。部落ん衆は、こう論じたものよ。

「政や、おまや、養うちもろた恩があるう。払うちやってくれんかい」

こうして政市つあんに借金がかけられて、土呂久指折りの地主の「樋の口」へ、奉公に出されることになった。政市つあんはやっと、小学校を卒業したばかり。「樋の口」から竹治さんに、奉公の代金の半分が前払いとして渡された。残りの半金は、奉公が終っちから払わるる。約束の年季、政市つあんは奉公をやむるわけにいかん。逃げて、じきに連れ戻しにくる。皿糸への里帰りは、盆と正月の藪入りに許さるるだけじゃ。政市つあんは正直者で、手を抜くことを知らざった。雨の日も風の日も、毎日毎日野良仕事に出かける。冬はまっ暗なうちから、真白う霜の降った山道を、椎茸の原木の伏せ込みに登っていく。「樋の口」にもう一人、悦蔵やんという奉公人がおった。二人は夜なべの草履づくりに精だしたあと、馬屋の二階の藁小積